

文化財ニュース No. 33

発行 加古川市教育委員会

編集 社会教育・文化財課（加古川市加古川町北在家23-1 TEL 24-1151）

中道子山城跡の第三次発掘調査終了

中道子山城跡は、石壘と総土壘の城郭 山城の完成は16世紀後半

中道子山城跡の構造・築造の時期を解明するために、平成元年6月から9月まで第三次調査を行ないました。調査対象地は、三の丸と推定されている場所です。今回はこれと関連して、井戸郭の調査もあわせて実施しました。そして、調査地にIからVまでの番号を付けました。三の丸で注目されるところは、城門の発見がまずあげられます。そして、中道子山城跡の三年に及ぶ調査から、城は最初石垣を用いて築城され、次に総土壘で強固な縄張りを施したことがわかりました。

I地区——建物跡みつかる

この場所からは、建物跡と方形突出部が発見されました。建物跡の規模は、柱の間隔が1.90メートルで、東西2間×南北3間のものでした。建物の基礎には、礎石を用いています。

I区の北端は、方形に突出しています。突出部の周囲には土壘を築き、前・左右がよく見えるようにしてい

ます。これは矢倉台でしょう。

土壘の築き方は、二の丸で検出された石芯を用いるものでした。この方法は、まず平坦な土地の周囲に石を積み上げ、これを壁にして土をかぶせています。この積み上げた石は、土壘の基礎にもなります。これは、山の急斜面を平坦な場所に造り替える土木技術なのです。

II地区——柵列がある・和鏡を発見

この場所の中央部から、東西に横断する柵列跡がみつかりました。柱と柱の間隔は、さきの建物跡の柱間隔と同じです。柵列は二列に並んでいます。この郭の北端は、土壘になっています。この柵は山城が決戦状態になった時、急いで立てられたのでしょうか。

II地区的北端から、直径5.40センチメートルの和鏡がみつかりました。鏡は、菊の花と雀を鋳だした花鳥文鏡です。

III地区——城門を発見（矢倉門だろうか）



三の丸城門の発見

東斜面を掘削したところ、城門跡が発見されました。門には柱跡がみられ、その幅は1.80メートルでした。門の戸は、片開きの可能性があります。門の両側には石垣があり、現在2石から3石の積み上げた石が残っています。門の西側の石垣は方形区画を造り、一辺が2.50メートルあります。東側は道に面した部分しか石垣は残っていませんが、この部分も方形区画になっていたのでしょうか。この石垣は25メートル行った所で北西に曲っています。この石垣の背後は、幅5メートルの土塁になっています。ここにも強固な守りの形をみることができます。

この門がある場所は、搦手(カラメテ)=裏手であり、矢倉門と考えられます。

この場所からの出土品には、備前焼の土器片や釘などがあります。

V地区——谷に三本の土塁を築く

井戸郭の場所です。井戸は長年使用されており、築城時からでは周囲の状況も変っています。ただ井戸の石を積み上げた状態は、当時のままです。井戸は周囲の地形から一段低い場所に設置されています。表面の土を除去すると、周囲に礫が敷かれています。そして、排水溝が谷に向って、幅30センチメートルで延びていました。

井戸郭の東も調査しました。ここからは、二つの建物跡がみつかりました。一つは地面に穴をあけ柱を建てた掘立柱建物です。もう一つは、礎石を用いた建物です。これは二つの時期に、ちがった形で建物があったことを

示しています。最初地面に直接柱を埋めた建物が焼失した後、地面を整地して礎石建物ができています。

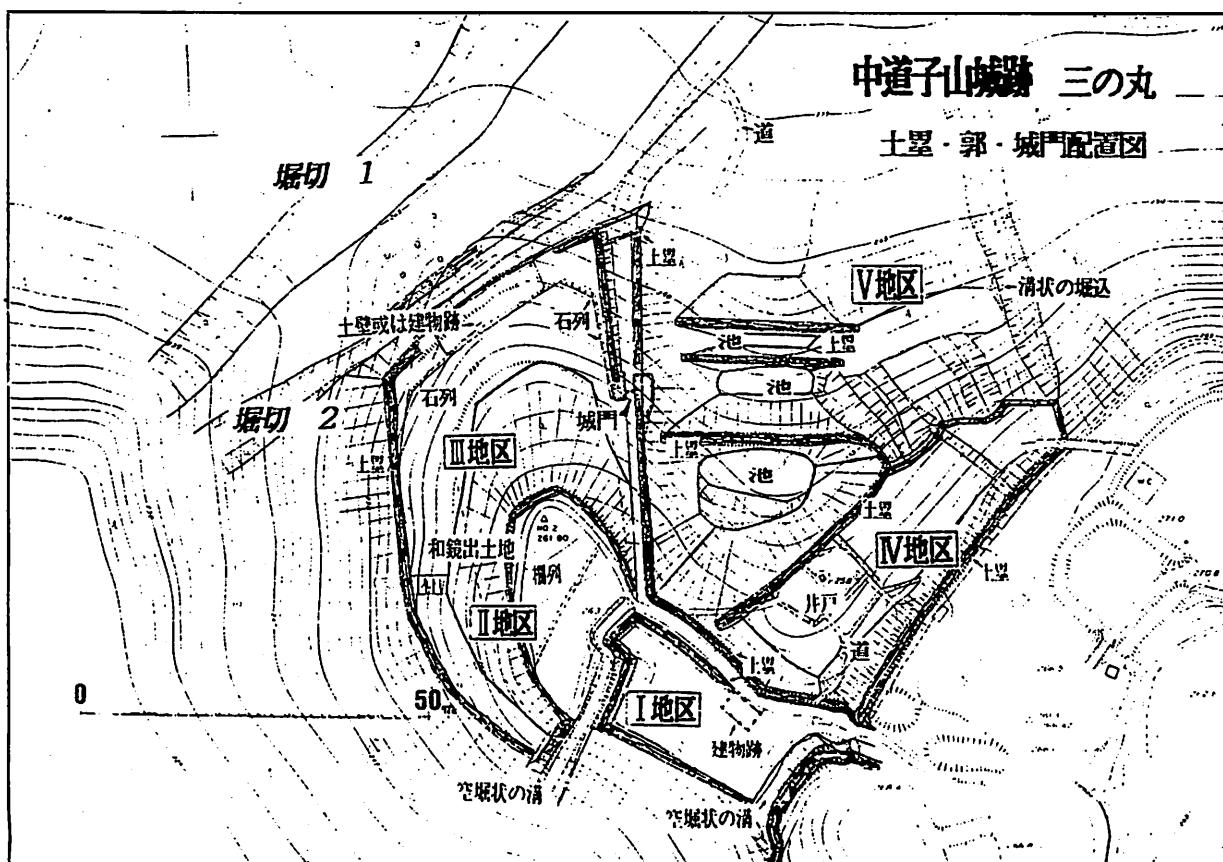
井戸郭から下の谷には、長い土塁が構築されています。土塁は谷を横断して、東西に長く造られています。ここから谷に向って降りていくと、土塁が三本連続して設置されているのをみることができます。今は樹木が茂っているため、井戸郭からはみることができません。これを下から見上げれば、砂防ダムを連想させるような景観になります。

土塁を本丸から数えると五本築かれており、山城は強固な守りだったのを感じることができます。現在井戸郭に降りる道がありますが、これは築城時にはなかったものです。

V地区——堀切

中道子山城跡の堀切は、三の丸の北側に上下二本掘削されています。上部の堀切は、底部幅1.90メートルあり、岩盤を掘り込んでいます。ここは大規模に掘削され、その高さは約7メートルにもなります。

●中道子山城跡は三年間の発掘調査から、鉄砲の使用がはじまる天文年間(16世紀中頃)に石垣の城郭として構築され、その後永禄年間(16世紀後半)に城域を拡張し土塁によって改築されたことがわかつてきました。そして、戦国時代の城郭について、基準指標を提起できる貴重な遺跡であると考えられます。この詳細については、今後刊行される調査報告書で発表したいと思っています。



加古川市内の指定文化財 —— 国指定文化財 <3>

1 絹本著色聖徳太子絵伝 <8幅>

(鶴林寺・重要文化財)

聖徳太子の生涯の物語を8幅で表現しており、第一、第二幅は善光寺如来の伝来のありさま、第三幅は太子の前生・生誕から4歳のころまで、第四幅は5歳で書を学ぶころから物部守屋らが仏像などを破壊するところまで、第五幅は堂塔の破壊から太子が19歳で戴冠するところまで、第六、第七幅は太子のいろいろな事績、第八幅は太子の死を中心として大化革新までを描いています。

各幅ともに「すやり霞」といわれる横帯で物語の場面を区画していて、上から下へと時代は下ってきます。

各々の幅は、鳥瞰図法により建造物、人物などを巧みに配置しています。全幅欠けることなく残っており、保存状況も良好であるので重要文化財に指定されています。南北朝時代(1332~1392)の製作と推定されています。

太子(聖徳)信仰は鎌倉時代以降広く普及しましたが、この絵伝を利用して絵説きを行なう布教活動も展開されたと思われます。写真は第八幅です。

縦 148.5cm 横 78.8cm



2 銅 鐘

(尾上神社・重要文化財)

銘文はありませんが、装飾の大部分が島根県松江市国屋町の天倫寺の鐘と同じ鋳型を用いて製作されており、このことから朝鮮高麗の顯宗2(1011)年前後に鋳造されたものと推定されています。

中段珠文帯には4か所に花形蓮華文を配し、その中间には異なった美しい唐草文を浮き彫りにしています。二体の天女が長目の天衣を翻して樂を奏している姿は実に優美です。

総高 123.5cm 口径 73.5cm



3 銅 鐘

(鶴林寺・重要文化財)

この鐘も銘文はありませんが、朝鮮の高麗時代11世紀後半の製作と推定されています。

仏像、飛天などの浮き彫りは欠いていますが、牡丹唐草文様は華麗です。多くの鐘は2撞座ですが、この鐘は3撞座で、この型式では最古のものです。

兵庫県下の朝鮮鐘は前記尾上神社の銅鐘とこの銅鐘の2口のみで、大変貴重な文化財であるといえます。

総高 94.5cm 口径 53.0cm



(「加古川市史第7巻」より。写真、市史編さん室)

長畠遺跡の調査

新しい弥生遺跡発見

平岡町の水田・畠の区画に、現在も古代山陽道の痕跡が残っています。今回その部分に宅地造成が計画されたため、平成元年6月に発掘調査を実施しました。発掘調査からは、弥生時代中期から後期の住居跡8棟が発見され、古代山陽道と推定される遺構はみつかりませんでした。次にその概要を報告します。

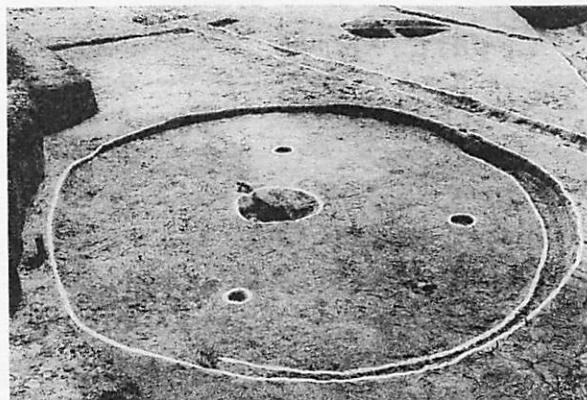
●弥生時代の遺構

古代山陽道の推定調査地から、弥生時代の住居跡が発見されました。この場所は遺跡の分布が知られていなかっただけに、新発見とでもいいくべきものです。住居跡は8棟が検出され、その内容は円形の竪穴住居が2棟、方形の竪穴住居が6棟でした。

円形住居は直径が7メートルで、中央に炉をもっています。もう一つの住居は直径は同じであるが、食べ物を貯蔵する穴をもっていました。この中から石鎌が2本みつかりました。土器の出土は極めて少なかったのですが、住居の時代は弥生時代中期と考えられます。

方形住居は、3メートル×5メートルで、他の住居もおおよそこの規模でした。掲載した写真は、住居に塗っていた壁土が落ち込んでいる状態です。また、ここからは周壁溝と柱跡3本が2列みつかりました。ここも土器の出土は極めて少なかったのですが、時代は弥生時代後期と考えられます。

住居の分布は調査地の北側に集中していることから、遺跡は北側に広がっていると想定されます。



初めての円形住居

東に流れる溝跡や祭りをおこなった跡、弥生土器を焼いた穴などがみつかりています。また、古墳時代5世紀中頃の朝鮮製須恵器が出土し、港が近くにあることが推測される所になります。砂部遺跡は、弥生時代前期から奈良時代まで続いた集落跡と考えられ、とくに溝跡からは弥生土器の出土が多く、加古川東岸の溝之口遺跡と並ぶ大規模な集落なのです。しかし、今まで遺跡からは大量の土器が出土するのですが、住居跡がみつかりませんでした。その住居跡が、発見されたのです。調査は、平成元年6月から7月に実施しました。

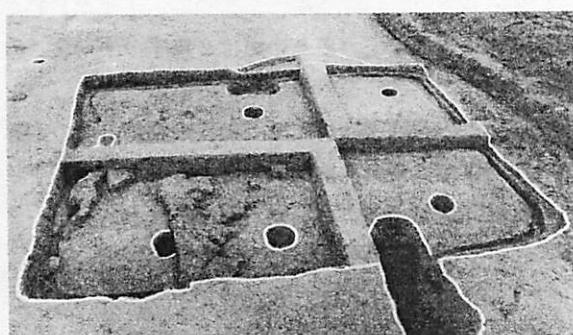
●砂部遺跡の住居跡

弥生時代前期の住居跡が、調査地の北東隅でみつかりました。その規模と形は、直径約4メートルの円形住居です。中央に60センチメートルの炉と、四本の柱がありました。住居内にあった土器から、弥生時代前期（新段階・約2200年前）と考えられます。住居としては昭和61年にもみつかりましたが、これは弥生土器を焼くためにつかう作業小屋でした。今回の住居は集落の一部であり、砂部遺跡では初めての発見といえます。そして、住居は集落の南端にあたると想定されます。以前に発見された弥生土器を焼いた穴（土器焼成場所）の時代は、弥生時代前期です。このことから砂部遺跡では、集落の南端から約100メートル離れて弥生土器を焼く場所をもっていたことになります。

調査地内からは、3本の溝がみつかりました。北西の隅にある溝は、弥生時代前期（新段階）。調査地中央の溝は幅1.90メートル・深さ60センチメートルで、弥生時代後期でした。いずれの溝も、北東から南東に流れています。この溝底からは、溝掃除のときについた足跡がみられました。

●住居跡は集落の南端

砂部遺跡は、大規模な集落があると想定されてきましたが、今回の調査から住居跡がみつかったことで、その南端に一步近づいたと考えられます。集落の中心は、さらに北側にあることが確実となってきました。



方形住居と壁土

砂部遺跡の調査

初めての住居跡発見

砂部遺跡は、加古川西岸を代表する弥生時代の遺跡です。遺跡は、49、50、51、61年度と調査され、今回で第7次の調査になります。今までの調査では、北東から南